

連城二紀彦

長編新探偵小説

敗北への凱旋

KODANSHA NOVELS

講談社
ノベルス



敗北への凱旋

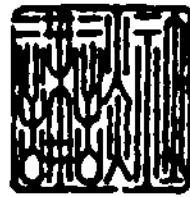
昭和五八年一月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価六二〇円

著者—連城三紀彦 © MIKIHICO RENJO Printed in Japan

発行者—加藤勝久

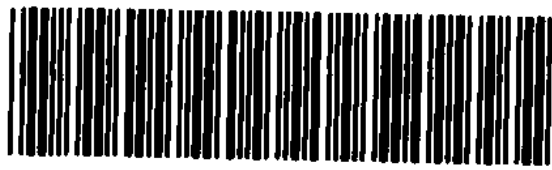


発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二二—二二 郵便番号一—二二 電話東京(〇三)—九四五—二二二二(大代表)
振替東京八—三九三〇

印刷所—大日本印刷株式会社 製本所—株式会社堅省堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。



日文 701512798

女北への凱旋

城三紀彦

ODANSHA

講談社
ノベルス

NOVELS

ブックデザイン 市川英夫
カバーイラストレーション 上村一夫
本文イラストレーション 上村一夫

目次

序章	ある終戦	7
もう一つの序章	もう一つの終戦	15
一章	ある戦後	20
二章	もうひとつの戦後	39
三章	ある戦中	109
四章	もう一つの戦中	150
五章	ある歴史	180
終章	ある一日	189
もう一つの終章	凱旋の日	191

序章——ある終戦

瓦礫^{がれき}を薄くまとった焼野に、夕闇はゆっくりと降りてきた。

昭和二十年八月十五日——

正午に玉音放送があつて、まだ数時間が経っていない。

その正午を期して、歴史は戦後という新しい時代に流れこんだのだが、雑音まじりのラジオで一人の神の声が告げた終戦は、大多数の国民の、まだ実感にはなっていない。忍び難きを忍んで、大本營の発表どおり、何とか希望を繋^{つな}いできたか細い糸が、突如^{とつじょ}断ちきられたの

である。

肉親を犠牲にした戦に敗れた痛恨に泣く者。

陛下の御心を察して悲しむ者。

泣くことも忘れて呆然^{ぼうぜん}とする者。

米軍の侵略におびえる者。

玉音放送の受けとめ方は千差万別だったろうが、誰にも共通していたのは、突然の衝撃を信じきれない、呆然とした虚ろさだった。それは巨大な静寂^{せいじやく}となつて、この日、国中を覆い尽していた。

何もかもが静かだった。

夏の暑い盛りである。

正午のサイレンと共に膨^{ふく}れあがった太陽は、歴史の最後の頁を焼き尽すように、この日の午後を通して、白い炎^{ほのお}を降らせ続けた。灼熱^{しゃくねつ}の光は、また、国民全ての気持までも焼き払ったかのようだった。歴史がこうも静かな一日を迎えたことはかつてなかった。それは虚無にも似た果てしない空白であつた。玉音放送の直後、皇居前で

は血氣に走った一部將校が自決するという断末魔の狂氣が演じられ、その後もぞくぞくと國民が押し寄せ泣き臥したが、白砂に影のように貼りついた姿には、処刑場へひかれ最後の天の裁きを待つ者の静肅ささえ感じられた。人々は声を挙げずに泣き続けた。

歴史が、またこうも明日のわからぬ一日をもったことはかつてなかった。一億玉碎という標語の果てにあるのが、たとえ滅亡以外の何ものでもなかったにしろ、その言葉にはまだ辿るべき一つの道があった。相次ぐ空襲に逃げ惑いながらも、人々には命を守るという目的があった。だが正午のサイレンとそれに続いた一人の地に墮ちた神の声は、人々をそんな縁からも断ちきって突如、静寂だけが蔓延った果てしない空白の世界へと投げこんだのである。周囲にはただ廃墟だけが広がっていた。その廃墟の中で、食糧難やあらゆる危機に打ち克って一つの新しい時代を生き続けなければならないという実感は、この日まで大多数の國民にはなかったのだった。

駄々っ広い空いっぱい燃えあがった光の炎が弱まり夕刻が近づくにつれ、静寂はますます深くなった。そうして、そんな広漠たる静寂のかた隅でそれは起こったのである。

戦前は豪華な洋館が並んだここ×町近辺でも、暮色が迫ると静けさが波のように広がらせていた。

風景には、底がなかった。この周辺は、四月の半ばの空襲で戦前の面影すら追えないほど壊滅していた。恰度、波のうねりを残したまま氷結した海洋のように、瓦礫はわずかな起伏で地上に広がっている。

数時間前まで大日本帝国だった一つの国もまた、こんな瓦礫となって崩壊したのだった。

遠くに議事堂の建物が広大な箱庭の玩具のように小さく見え、その右方に皇居の森がこれも底辺を這うようにひどく低く連なって見える。

夕闇は、まず地上に暗く積った。

無秩序に散乱した瓦礫が、何重にも影を重ねるのだ。

灰燼^{かいじん}は、日中に吸いこんだ熱氣を噴きだし始めていた。灰燼には空襲で焼け死んだ人々の灰も混ざっている。熱氣と共にその死臭^{しきゅう}が吐き出され、地上の闇をいっそう暗くしている。

生々しい熱氣と何もない風景の寒々しさが不釣合だった。

初め、それは闇に覆われた大地の奥深くから地鳴りのように響いて聞こえた。

夜が近づき燈^ひひとつない廃墟から人影は一掃され、その時刻、その異様な物音を周辺で聞いたのは、浮浪児のような身装^{みなり}をして彷徨^{ほうこう}していた七、八歳の少年だけである。焼け出された孤児か何かなのか、ボロ着の方々が破れ土焼けた躰^{からだ}を裸同然にさらけている。荒涼たる廃墟の中で、瓦礫の一片にも充たないほどその躰は小さかった。

瓦礫の一隅が不気味な音に揺いだ。少年は怯^{おび}えて、その小さな躰をさらに小さくすぼめた。地底に埋まった

人々の魂が蘇^{よみがえ}って、地上につきあげてくるような音だった。

しばらくして少年は、その音が地底からではなく反対に上方から滝のように流れ落ちてくることに気づいて、空を見あげた。

陽はとうに荒野にも似た廃墟の、涯^{はて}しない端に没していたが、この時刻、空にはまだほの白い明りが残っていた。

恰度、廃墟に立つ少年の小ささを真似るように、広大な空にも、その広さに紛^{まぎ}れこむように、一機、飛行機がとんでいる。

それはいつの間にか、少年の頭上を通過しようとしている。闇に澱^{よど}んだ湖底から淡い光の残った水面をおおぎ見るように突っ立って、少年は、実際その水面を這^はう水すましの影でも追うように、機影を見守っていた。

少年はこの日、戦争が終ったことを知らなかった。ラジオの前で人々が泣き臥している姿は見たが、それが何

故かも知らなかった。

少年は、敵軍の航空機ではないかと思った。

遠すぎて機体の大きさも何もわからないのだが、プロペラの回るような音だけは瓦礫に反響して地上に波紋を広げている。B 29ではない気がしたが、頭上を通過するとまもなく機影からは爆弾のようなものが落とされた。

少年は恐ろしいと思う前に、機影から不意に零れだした無数の点が、空に描いた模様の美しさに見惚れた。

それは、暮れなずんだ空が一点の穴から不意に影の露を降らせたようにも見えた。

影の雫は、最初ひと条の流れに繋がって、虚空にゆったりと弧を描いていたが、やがて水中に巨大な網でも放ったように広範囲にばらまかれた。

するとまたひと条、機体からそれは流れ出し、中途から波のように崩れ……またひと条……

少年は空襲で焼夷弾が落ちてくるのを見たことがある。無数の糸を引いて夜空から降りしいてくるその様に

も恐さよりさきに美しさを覚えたが、今、夕暮れた空を舞い降りてくる影の雫にも不思議な美しさを感じていた。それは淡い光に、自らの光で燃えつきた螢の無数の残骸が降り敷いてくるようにも見える。

やがてプロペラの音の波紋が遠ざかり、戻った静寂の中に、それは音もなく落ちてきた。

糸車のようにくるくる回りながら落ちてくる。

少年はその一つに思わず手を伸ばしたが、それは少年の手を逃れるように、一、二、三步離れた灰燼の中に落ちた。地上の闇で形を喪ったそれはところどころに炎のようなものを燃えあがらせている。少年はさすがに気味悪くなつて足を後ろに退こうとしたが、意志とは逆に少年の軀はそれに近づいた。

少年はしゃがみこんで恐る恐るそれを手に握った。

すぐにはそれが木の枝だとは気づかなかった。少年の腕ほどの長さに切りとられたその枝には細長い葉が渦まうずまくようにからみついて、所々に、これも少年の掌ぐらてのひらい

の大きさに花が開いている。真紅の花弁を幾重にも重ねあわせ、暗い葉影に浮きたって見える様は、本当に燃えあがる炎であつた。炎色の花弁に触れた指先から熱い血のようなものが軀の中に流れこんでくる。

枝には糸のようなもので白い紙片が結びつけられている。少年は目を凝らしたが、その紙片に書かれた文字が何であるかわからなかった。なんとかわかつたのは、それが日本の文字でないことだけである。紙片に散つた異国の文字は、少年が今までに聞いたことのない不思議な言葉を、うす闇のむこうから語りかけてくるようだった。

その間にも、少年の周囲に点々とそれは落ちてくる。

瓦礫の淵に沈む花。

灰にまみれて、炎の色を弱める花。

薄闇を撥ねのけて、燃えあがる花。

その午後、盛夏の光に焼かれ、燃えあがつた空から、最後の炎が、そんな花の形で地上に落ちてきたかのよう

である。

少年はその花を一つでも多く拾おうと、駆けだした。異邦の文字も花の色も自分に何かの言葉を伝えようとしている、そんな気がしたのだ。少年は四月のこの一帯の空襲で家族の全部を喪っていた。それから四ヵ月、少年はたったひとりで焼け跡をさまよい続けて生きのびてきたのだ。大人達も同じ年頃の子供たちも、飢えきつた野良犬同然の一人の子供に構っている余裕などなかった。たった一人、小さな、その骨の透けて見える細い軀で生きてきた。それが今やっと、天から誰かが、自分に花の色で言葉を語りかけてきたのだ。

その言葉を一言でも多く聞きとろうというように少年はあちこちに落ちた花を拾いながら走り続けた。

機体はもう遙か彼方に消え果てていたが、それでもまだ降りしきる点の流れを夢中で追った。

少年は何も知らなかった。

花の枝に結ばれた紙片の文字が、仏蘭西語で「免罪

符”という意味であること——遠い異国で遠い昔、人間の罪を宥すために神を冒瀆する人々の手で配られた贖罪の符であったこと。

またその花が夾竹桃きょうちくとうと呼ばれる花であること——夏の盛りに太陽の炎を吸って自らも炎となって燃えあがる花であること。夾竹桃の葉や樹皮には毒があること——花弁の炎の色が、人の命を焼きこがすための色であること。そしてまたその毒のために、数時間後、壊れかけた防空壕のかたすみで、何とか生きて終戦を迎えた小さな命を棄てる運命にあったこと——

少年は走り続けた。

やがてその小さな軀は瓦礫のどこかに飲みこまれ、後にはただ色濃くなった夕闇を敷きつめて廃墟だけが残った。

廃墟の方々に、花は恰度広大な荒野に消え残った無数の野火のように燃えている。

灰と化した無数の死者の命の残り火のように——

また廃墟にそれでも生き残った人々の命を今度こそ最終的に燃やし尽そうとする業火ごうかのように。

夕暮れが夜へと移りかわる短い間の、つかのまの出来事だった。

影の露の最後の一雫が地上に降りきるのを待つようにして、不意に崩れ落ちてきた終戦第一日目の夜の闇に、花の色もその炎も、埋もれていった。

昭和二十年八月十五日午後七時前後、その花は東京のかなり広範囲に降ったようである。大日本帝国はそんな花の色に送られて崩壊したのである。それは、戦争という歴史の終章に書かれた一篇の詩であった。

花を降らせたのは、東京から数里離れた厚木基地の特攻隊員である。

尤もその特攻隊員も厚木基地の指令官も誰も、何故自分達はその花を東京の焼け跡に降らせることになったか、その理由を知らなかった。

玉音放送から六時間後、大本営からの通達と称して一人の男の声で、厚木基地に指令が入った。指令の内容は飛行場の正門に置いてある六つの南京袋の中の花を東京上空にばら撒くようにというものであった。

終戦を迎えたばかりで飛行場内は騒然としていた。前夜にはまだ多くの若者が滑走路から死にむかって飛びたっていたのである。生と死のドラマが極限状態で演じ続けられてきた渦中^{かちゅう}で、唐突に迎えた敗戦である。玉音放送と共に何の意味もなくなった滑走路は、ただどこまでも長く続き、夏草の影だけが、照り返される白い光に揺れていた。人々の心も滑走路のただっ広さに呑みこまれたように麻痺^{まひ}していた。誰ひとり疑うことなく、指令はただちに実行に移された。夕映えが灰色に薄まる時刻、幾多の若い命を死の大空へと放り出した滑走路から、こうして最後の特攻機が花を積んで飛びたったのである。

その特攻機が戻り、夜が落ちる刻になると、さすがに

首をひねる者が現われた。念のため本部に連絡をとると、そんな指令を発した覚えはないという。改めて正門の警備員から聞きだしたところでは、夕刻そのおかしな指令が入った直後に、正門前を通過した一台のトラックからその花の詰まった南京袋は放り出されたいらしい。トラックは南京袋を落とす際、速度をわずかに落としただけで、やがて砂煙の中へ消えていった。

トラックを運転していた者の姿も目撃されていないし、秘書官のような口調で指令を伝えてきた男の正体もわからなかった。

夾竹桃は枝や葉に毒を含んでいる。終戦が信じられなかった狂人じみた愛国者が、その毒を撒き散らして一億玉碎の標語を遂行しようとしたのか——それとも花の枝に結ばれていた免罪符から考えると、戦争に批判を抱いていた一狂信的^{キリスト}基督教徒が、神を冒瀆した国民に自決を要求したのか。

何もわからぬまま、結局この事件は、大方狂人の大し

た意味もない悪戯いたづらだろうという程度の憶測で片づけられてしまった。その狂人が夾竹桃を毒として東京中にばらまきたかったのかどうかも定かではない。

その毒のために、都民に死者が出たという報告はなかった。戦争は終結したが、その後も飢餓きがと病氣と負傷とで、多くの死者が出ている。八月十六日の朝、廃墟の一面の防空壕で、崩れかけた入り口からさしこむ朝の光に手をさしのべるように倒れていた少年の死も、そんな一つとして誰からも省りみられることはなかった。

もちろん焼け出された都民の一部は、焼け跡の方々に、炎の嵐の残り火のように点々と散っている花をみとめた。だが、終戦の衝撃が一陣の風のように通過した後、人々はその日一日の命を繋ぐ術すべを見つけるのに夢中にならなければならなかった。

花は、そんな現実からはおよそかけ離れた幻のような遠い場所に落ちていたのだ。少年が聞いた誰かの言葉を、その花にも紙片の異国文字にも感じとった者はなか

った。誰の目にも花は、焦土の灰や石と変りなく映った。

翌日も陽ざしは強かった。花はその日のうちに枯れ、紙片の文字も灰にまみれて消えた。

花をみとめた者の中には仏蘭西語を読める者もいただろうが、たとえそれが免罪符とわかって、罪という言葉葉を胸に響かせた者はなかっただろう。数限りない殺戮ころりくのくり返された戦争という巨大な罪の前では、一個人の罪などあまりに卑小であった。花が灰となって焦土に沈むころには、そんなわずかな人々の記憶からも、それは消えていった。

花と贖罪で飾られた一つの終戦の風景は、こうして、歴史の大きな変換期の、空白にも似た一頁に葬られ、忘れ去られたのである。

もう一つの序章——もう一つの終戦

銃声は、ト短調の不協和音に似ていた。主和音のミを外^{はず}していた。

——その音はまちがっている。

不意になぜ自分の体が床へと崩れはじめたのかわからぬまま、彼はそんなことを叫ぼうとした。彼にはなにもわからなかった。なぜ数分前扉を突き破るようにして入ってきた女がいつものように自分にすり寄ってくることがなく、扉を背にして突っ立ち、ぼんやり彼の方を眺めていたか、いつも通り、白い毛編みのショールで顔の半分を闇に埋め、片方の目だけで言葉にはならない淋

しさを訴えるようにしてじつと彼の顔を見守っていたか。そうして「どうした」と彼が機嫌をとるように声をかけ近寄ろうとしたとき、突然いつもより早い中国語で「もう何もかも終った」とか「あなたは死ななければならぬ」と女は叫んだ。自分でも何を喋っているかわからぬといったカン高く吐き出される声は、淋しげな顔色と似合わなかった。袖を通さずに羽織った外套^{がいのとう}の胸もとを押えつけた指が蒼^{あお}くなつて、小さく震えている。

降誕祭^{クリスマス}の前夜だった。この横浜の中華街の焼け跡近くにある小さな安宿もホールに色電球を飾り、祝祭らしい色彩^{いろどり}りで装われている。どこかの部屋から、酔った米兵が陽気に謳^{うた}いあげるジングルベルズが響いていた。

「寒いのか」早口の中国語をほとんど聞きとることができず、彼は笑いかけるように唇を歪^{ゆが}めてさらに近づこうとしたが、女は拒むように首を振った。そして震える指で、突然外套の胸陰から銃器をとり出したのだ。銃口の黝^{くろ}い穴が、女のぼんやりした目よりしっかりと彼を見据^{みす}